

# 令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

## 事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 鹿児島県 】

学校名【 出水市立出水小学校 】

1 実践テーマ	I・III
2 実施対象者 (学年・人数)	4年1組：31人、4年2組：30人 5年1組：42人 6年1組：48人
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 ( ) ② 行事名 ( ) ③ その他 ( 総合的な学習の時間 ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	1 パラリンピックの意義や歴史、価値等への理解を深める。 2 パラリンピアンへの講演や実技指導を通して、自己の生き方や共生社会の構築について考える。
5 取組内容	<p>1 各学年の年間の取組内容を確認し、学校全体で目標達成に向けて実践した。</p> <p>1～3年生は、主に体育科でのルールの工夫を中心に実践した。</p> <p>4～6年生は、パラリンピアンへの講演や実技に向け、気持ちを高めるようにした。</p> <p>(児童の感想)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ リレーで、みんなが応援してくれたことが嬉しかった。</li> <li>○ ルールを守ってするドッジボールは楽しかった。</li> <li>○ 勝っても負けてもけんかをしないようになった。</li> <li>○ 友達と協力してプレーすることの大切さに気付くことができた。</li> <li>○ 誰にでも挫折をすることがあるけど、そこであきらめないことが成功につながるのだと思った。</li> <li>○ 今はきついことでも、続けることの大切さに気付くことができた。</li> </ul>

学年	教科・領域	単元・題材等	取組内容	実施月
4	体育科	持久走	・ 持久走大会に向けた実技指導	11月
	算数科	徳の計算	・ ホッチャを体験し、その結果をもとに、授業へつなげる。	12月
5	体育科	ラインサッカー	・ ブラインドサッカーの体験を通して、目の不自由な方への思いを深める。	6～8月
	体育科	チーボール バスケットボール タグラグビー	・ 「フェアプレイ」を重視するゲーム	11～12月 2月
6	社会科	世界のなかの日本 新しい日本、平穏な日本へ	・ スポーツを通じた国際交流 ・ 戦後の復興の象徴である茨城オリンピック	2月 1月
	道徳科	スポーツの力 東京オリンピック 誰にこめられた思い 25 入ってつないた金メダル	・ パラリンピック選手の生き方 ・ 東京オリンピックの原に作られた国旗について ・ 東京オリンピックジャンプ競技	4月 6月 7月

【各学年の取組内容】

2 パラリンピアンによる講演・実技（令和3年11月9日）  
東京パラリンピック女子車椅子バスケットボール日本代表の主将である網本麻里選手を招聘して実施した。

(1) 講演

2回の手術により、医師からバスケットボールを諦めるように伝えられ、悩んでいた網本さんは、車椅子バスケットボールに出会い、新たな目標をもつことができたと話した。「つらい・辞めたい」と思ったときは、「無理せず、練習を休んで、元気になったら練習を始める。」「『あのときやっておけばよかった。』と思うぐらいなら目標に向かって進んでいく。」と話した。選手村の生活の様子を聞いたり、パラリンピックで着用していた代表ユニフォームを見たりしたときは、パラリンピックのことを身近に感じることができたようだ。



(2) 競技用車椅子体験

通常の手押し車と違う競技用の車椅子体験では、手を使って車輪を回転させることに苦戦していた。方向転換は、コツをつかむと、円滑に操作できた。競技用車椅子は、車輪の設置角度が違うことや、ブレーキがないこと等も学ぶことができた。



(3) デモンストレーション

網本さん対出水小代表3人（児童1人と教師2人）で試合を行った。出水小代表の3人は善戦したが、車椅子を動かすことに加え、パス・ドリブルをすることや、ゴールに届くようにシュートをすることは、大変困難であった。



### 3 燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会出張授業

(令和3年11月18日)

燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会実行委員会事務局主催の出張授業を5年生に対して行った。前回行ったパラリンピアン講演・実技を受けて、2025年に開催される特別全国障害者スポーツ大会の競技種目であるボッチャ、フライングディスクの体験や、通常の車椅子の体験等を行うことで、共生社会の在り方について学んだ。

#### (1) ボッチャ

赤ボール、青ボールを投げるチームに分かれ、対戦した。ランプ（投球補助具）も使用することで、より容易にゲームができることも知ることができた。



#### (2) フライングディスク

多くの児童が体験したことのあるフライングディスクなので、使い方は理解していた。ただ、的を通すとなると、困難さを感じていた。椅子に座りながらとなると、さらに困難さを感じていた。



#### (3) 車椅子体験

前方を向いて障害物の間を抜くことは容易にできた。しかし後ろ向きに障害物の間を抜くことは、見づらさや恐怖心から困難さが増したようである。



### 6 主な成果

- 1 パラリンピアン講演により、パラリンピックの意義や価値等について、学ぶことができた。
- 2 パラリンピアン講演や実技指導により、目標をもって日々生活をする心、努力する心、諦めない心等、自己の生き方を見つめ直す機会になった。また、車椅子の体験活動により、共生社会の在り方について考える機会となった。
- 3 パリオリンピック・パラリンピックの興味・関心が高くなった。併せて、2年後に開催される燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会の興味・関心も高くなった。
- 4 アンケートの結果から、オリンピック・パラリンピックに興味のある児童が85%を上回った。また、社会や人のために役に立つことをしたいと思っている児童が96%であった。

7実践において工夫した点 (事業の特色)	<p>1 全学年が教科や総合的な学習の時間の授業を通して、横断的に教育活動を展開したこと。</p> <p>2 世界で行われる「オリンピック・パラリンピック」と、日本で行われる「燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会」について、関連させることで、自己の生き方や共生社会の在り方をより深く考えたこと。</p>
8主な課題等	<p>1 事業の参加が決定した時点で、学校全体や各学年で実践することについて、早めに全職員で共通理解する必要がある。</p> <p>2 本校は、上学年に対して講演や実技を行ったが、下学年に対しても、実技等をする機会を設ける必要がある。</p> <p>3 コロナウイルス感染症の対策のために、保護者や地域、近隣の学校等への参加の呼びかけができなかった。共生社会を実現するためには、一人でも多くの理解が必要であると考え。</p>
9来年度以降の実施予定	<p>1 全学年が教科や総合的な学習の時間の授業を通して、横断的に教育活動を展開できたので、次年度もその内容を継続する。</p> <p>2 共生社会の実現を目指して、講話や実技は行っていく。</p>